

痛む足を引きずりながら、勇次はやっと駅までたどりついた。

駅前には、立派なロータリーができ、それを囲むようにして新しいビルが建ち並んでいる。勇次が見たことのないビルばかりだ。

変わりにはた駅前 景観を目にし、まるで知らない街に迷い込んだような錯覚にとらわれた。かつて通った飲み屋横丁は路地ごと姿を消し、その跡地には六階建のひととき大きなビルがデンと占拠している。区画整理でもあったのだろうか。駅の周り一帯がすっかり新しい街へと変わってしまったている。なじみの店は一軒も見あたらない。

これ程までに変わってしまうものか…、

そう思いつつも、

仕方がないよ…、それが時代の流れというものだから。

そう自分を納得させ、勇次は目当ての店を捜すのをあきらめ、そのまま改札口へ向かおうとした。

が、ふと足を止め、念のため…、とその大きなビルの地下へと続く階段を降りていった。そこは飲食店街になっていて、その奥まった一面に見覚えのある暖簾が懸っていた。紺地に白く、

うめか

三文字を染め抜いた、その暖簾はひどく色あせ、ところどころ綴れてきている。

ビルの新築に伴い、あの「うめか」の店が、新築なったビルの地下へと移ったのだ。勇次は少し元気を取り戻し、

「梅ちゃんしばらく…」

と、その暖簾をくぐった。

「いらっしやーい」

間延びがした声が返った来た。

したのは声ばかり…。声の主は客の勇次を見ようともしない。仕込み仕事はまだ終わっていないのか、カウンターの途中でしきりに手を動かしている。

「昔のまんままだ…、無愛想まで」

そう心で呟きながら勇次は椅子に腰を下ろし、カウンター越しに梅ちゃんの手許を眺めていた。その目の前に梅ちゃんの左手がヌーツと延び、お冷やのグラスが置かれた。それっきり、梅ちゃんは尚も俯き仕事にかかりっ切りで、勇次の注文を聞こうともしない。勇次も黙ったまま梅ちゃんの手許を眺めていたが、少しじれてきて、

「梅ちゃん、いつものやつ！」

と酒の催促をした。

その声に梅ちゃんはひよいと顔を上げ、

「あら…」

と、しばらく勇次の顔を見つめていたが、やがて、

「えっ、あんた波河さん？」

とびつくり顔をする。

勇次がこくりと頷くと、

「波河さんなのね、ほんとに？」

そう言いながら梅ちゃんはつま先立ちしてウンター越しに勇次の足元を覗き込む。「あるよこのとおり…」
覗き込む梅ちゃんの目の前に勇次は片足を上げて見せた。

「長があーいご無沙汰ね、もう一世紀になるわよ、あれから…」
梅ちゃんの口から滅多に出たことのない冗談が飛び出した。

「あれから」とは、言うまでもなく勇次がこの街を去ってからである。

本社から勇次が任されていた支店の閉鎖が本決まりとなり、その事後処理を済ませ、勇次が広島の本社へ戻ったのは平成三年の秋のことである。

それ以来だから確かにもう随分と年月がたっている。
それにしても、

「一世紀とは、ちと大げさな…」

そう言って勇次は笑った。

その笑いに梅ちゃんもつられて顔を崩した。

その梅ちゃんの顔のほころびを眺めながら、

「梅ちゃんも少し変わったかな？」

と、勇次は感じていた。

変わった、というのは顔の小皺のことではない。たしかに、梅ちゃんの小皺は、年相応に増えているが、勇次が感じたのは、これ、とうまく言い当てることが出来ない変化が梅ちゃんの中に生じたように思えたのである。

「うめか」

そんな粋な名がついているが、梅ちゃんがやっているこの店は、カウンター席だけの一杯飲み屋である。それも、ただの飲み屋とちがいで、梅ちゃんが出す酒は、梅割りだけで、日本酒もビールも出さない。それに…、ここの梅割りは一風かわっている。近頃はやりの焼酎をお湯で割り、そこに大きめの梅干しを落とす。そんな類の代物ではない。焼酎を生のまま、やや大きめのグラスに注ぎ、それを客の好みで一分から二分ほどの梅酒で割る。その梅酒割りを「うめか割り」と、この店では呼んでいる。

焼酎を梅酒一で割るのを「一割りうめか」、梅酒二で割ると何故か「八割りうめか」と呼ぶ。割数が逆になるのに大した理由はないらしい。割り方は一・五もあれば二・五もあり、客の好みによつては0・五というものもありなのである。焼酎も梅酒も種類はない。焼酎は梅ちゃんこだわりの一品だけだし、梅酒に至っては、梅ちゃんが自分で造る自称「うめか秘伝」の「銘酒」だけなのである。その銘酒を客の好みで割った梅割りを、突き出しの小皿と共に出す。それだけの店なのだ。料理と言えば、これまた梅ちゃん自慢のモツ煮の小鉢が定番で、それに季節、季節で何品かの小鉢料理がメニューとなるだけである。

そんな店なのに客は不思議といつも絶えない。暖簾をくぐっても空き席がないことさえある。そんな時は立ち飲みのお店になる。その立ち飲みが不思議と店に良く似合う。要するに腰を据えて飲む店ではない。列車待ちの時間つぶしに、ほんの一杯と決めて飛び込む店なのである。だからびっくりするほど安い。それが売りの店なのである。

「いつもの…」

と勇次が言ったのは、その割り具合で、梅ちゃんは客の顔でそれをすっかり覚えている。無愛想なくせに、梅ちゃんは一度でも店に来た客の顔と好みは決して忘れないのだ。

勇次の好みは焼酎九に梅酒一の「一割りうめか」である。八割りにすると梅酒の

甘みが勝ちすぎて焼酎の風味が飛ぶ。そんな気がして、いつの間にかそれが勇次の「いつもの」と決まっていた。

梅ちゃんが出してくれた、その一割りうめかを、一口ぐいっと腹に収め、勇次は改めて店の中を見回した。

店は昔の古い木造店舗から新しいビルの地下に移っただけで、何もかも昔のまんまである。店の造りや広さもまんまなら、カウンターや椅子も、グラスや小鉢までまんまのものを使っている。

梅ちゃんもあの頃より老けてきているが、それは勇次だって同じことで、勇次のおつむはすっかり白くなっているし、てっぺんのつむじ廻りときたら、もはや過疎にちかいのである。

今は六階建ビルの地下に閉じ込められているこの店も、勇次のおつむが黒く茂っていた頃は赤い提灯横丁のどん詰まりでしんがりの提灯を灯していたのである。どん詰まりといっても、店の裏の木戸を出れば、そこは鉄道の線路で、線路の向こうは神社の森になっていた。提灯較べをしている飲み屋の中で「うめか」の店は一番間口も狭く、古ぼけていた。ちよいと飲み客にとってはそれがかえって気楽で、

その際だった安さは、梅ちゃんの無愛想も込みの値段だった。列車待ちの時間をつぶすためにふらつと暖簾をくぐり、効きの早い梅割りをぐいっと呷る。金もかからないし、空きっ腹に呑む梅割は手っ取り早くその効能を發揮する。それに列車の近づく音を聞いて店を飛び出せば列車に悠々と間に合うのである。客の入りが良いのはそんなところが受けるのだろう。何しろ暖簾を出て、突進すれば、ホームまで一分とかからない。列車に飛び乗ってウトウトする間に自宅のある駅に着く、という計算になっているのである。

ここは国鉄と私鉄が併走していて、駅は東側が国鉄で反対側が私鉄になっており、店はその国鉄側にある。勇次がこの店に通い始め頃は、今のJRはまだ国鉄と呼ばれていた。その国鉄は、勇次がこの街を去る数年前に、分割民営化されたが、サービスや効率の悪さは一向に変わらなかった。併走している私鉄の方はダイヤが充実していたが、JRの方は至って便利が悪く、ラッシュ時を過ぎると、列車が来るのは一時間に精々二本か多くて三本、それが夜の八時を過ぎれば一本に減る。勢い一本乗りそびれると二十分も三十分も、時には一時間も待たされる。だから列車を待つ者は誰しも「うめか」に入りたくなるのだ。

「うめか割り」は財布には優しくても、地が焼酎である。梅酒独特の風味と、その甘みで、焼酎の円みが出て、口当たりは至って良いが、調子に乗って飲んでいると、とんでもない失策をやらかす。列車めがけて走っている間は良いが、飛び乗って列車が動き出すと、列車の揺れで飲んだ酒が腹の中で暴れ出し、足を取られ、そのうち腰まで怪しくなってくる。目的駅に着いた途端にホームにへたり込んだりするのである。そこは梅ちゃんも心得たもので、客が三杯目のお代わりをしようものなら、

「止めときな、腰が抜けるよ！」

と、そっけなく客を追い出すのである。

よっぼどの酒豪ならいざ知らず、並の者なら「うめか割り」は、一杯でほどほどに出来上がり、二杯飲むと足を取られ、三杯も飲むと腰が抜ける。

梅ちゃんはその客の酒量を心得ていて、頃合いを見て客を追い出すのである。それが梅ちゃんらしい心遣いなのだ。

〃〃〃

この街は伊勢湾に面した地方都市で、その頃は人口も二十万に満たなかった。勇次がこの街に来たのは田中内閣が発足し、日本国中が列島改造ブームに沸き立っていた頃である。会社は広島に本社を置く家具の製造、販売のメーカーで、業界でこそかなり名が通っていたが、この地方には販路がなく、会社の名もほとんど知られていなかった。そんな街で新しい市場を開拓するため、支店を開設することになったのである。この街はもともと城下町で県庁の所在地でもあり、近隣には大きな石油関連のコンビナートがあつて、そのベッドタウン的な役割を兼ねていた。大規模なスーパーや造船所も進出し、これからの発展が期待できる。会社の上層部はそう判断したのである。

その支店の開設と、販路の確立の役割を背負う人材として、白羽の矢がたったのが、入社してまだ五年余しかたない勇次であった。入社三年目頃から、勇次は営業部でめきめきと成績を伸ばし、同期では抜きん出していた。そんな勇次のやる気を上層部が買つての抜擢である。

いくらやる気があるとは言え、何の実績もない町に、ゼロからあたらしく販路を

築くのである。必要なのは、これまでの実績や経験より、むしろ体力と気力、そして粘りである。仕事は頭や経験ではなく、怖い物知らずのがむしやらさと、足と口である。

最近ではインテリアの一部として扱われるようになったが、その頃はまだ家具、調度の時代である。それに、家具の業界は世間が考えるより、時代の流れや生活文化の変化に敏感に左右されるところがある。

嫁入り道具としての三点セットや、桐や黒檀を使ったタンスや長持など、高級家具の需要が、生活様式や文化の流れで段々と細ってきて、団地や洋風建築の増加にもない、家具の需要は質や種類、そしてデザイン面でも多様化してきた。そこへもってきて、外国から輸入される格安の家具との競争にも勝たなければならない。そのためには若い世代の新しい感覚と、時代の流れを柔軟に先読みし、他より一步を先んずる営業センスが求められる。

高卒が多い会社で、経験に富むベテラン社員を差し置いて大卒で年功の浅い勇次に白羽の矢が立ったのは、そんなところにも理由があった。

赴任して二年ほどの間は、それこそ靴底をすり減らして毎日一人で東奔西走し、一つ一つ煉瓦を積み上げるような地道な営業活動を行い、少しずつその成果を挙げていった。その間、部下も一人増え二人増え、支店開設から七年が過ぎた頃には十人ほどの部下を抱え、売り上げも同じ規模の支店の中でトップに躍り出ている。勇次は取引先の紹介で知り合った妻の聡子と結婚し、すでに夫婦の間に二女が生まれていた。第二次オイルショックが収まり、大平首相が病で辞任して鈴木善幸内閣が発足していた。勇次が二駅先の駅の近くに土地を購入したのはそんな時期であった。家族四人で新築なった新しい家に越し、勇次の列車通勤が始まった。

「うめか」の店を知ったのも、この列車通勤を始めたのが、そもそもそのきっかけである。予定していた列車に乗り遅れ、次の列車まで三十分の時間をもてあまし、ほんの一杯の積もりで飛び込んだのが「うめか」との出会いだった。

飛び込んで見て驚いたのは、その店が梅割りだけしか出さないことばかりではない。経営者の梅ちゃんがとても風変わりなのだ。無愛想と言ってしまうばそれまでだが、だだの無愛想ではない。口数も確かに少ないが、それよりも何よりも、ほとんど顔の表情というものが無いのである。

能面とでも言うか、客が何を言っても笑いもせず、かといって怒る訳でもなく、

まるでロボットのようには機械的に応対するのである。この種の店の常識である客に對するリップサービス、つまり、客に對するお愛想を一切ふるまわないのである。日によっては暖簾をくぐった時の気の抜けた「いらっしやーい」と、帰る時のぶつきらぼうな「おおきに」だけしかその声を聞けないことさえある。客が何かを注文しても、うんともすんとも言わず黙って注文の品を出す。それでいて客の好みは心得ていて、二度目には何も言わなくても好みどおりの品を、欲しいなと思うときにすっと出してくれる。

梅ちゃんはもう色香を売りにする歳ではないのだが、色白で、よく見るとかなりの美人なのだ。それにすらりとして垢抜けがしたところがある。微笑めばきつと艶やかな花が咲く筈なのである。

でもその微笑みがないのが、かえって男心をくすぐるらしく、なんとか梅ちゃんを笑わしたいと、客の方が逆に愛想を振りまく羽目になる。ところが滅多にその手は桑名の梅ちゃんなのである。

そんな無愛想な梅ちゃんなのに、その割には客足が途絶えないのは、その物言わぬ観音様の摩訶不可思議な法力に客の心が絡め取られるらしい。

勇次は相客の一人から、梅ちゃんが若い頃に宝塚の舞台に立っていた、という話を聞いたことがある。そういえば、すっかりセピア色に焼けた大判の写真が何枚か壁に貼ってあり、よく見るとそれがどうやら舞台衣装の梅ちゃんらしいのである。暖簾に染め抜かれた「うめか」も、宝塚時代の梅ちゃんの舞台名から取ったものだと、その相客は自慢げに語っていた。

その梅ちゃんが、客の少ないとき、自分の方から勇次に話しかけるようになってくれた頃、勇次にはこの街を去らなければならぬ運命が間近に迫っていた。

誰もが異常なまでの好景気に浮かれていたバブル景気が崩壊し、日本が不況のどん底へと真つ逆さまに落ち込み始めていた。バブル景気が終わってみると、勇次が苦労して開設した支店は、売り上げが激減し、採算ラインを割っていた。

本社に戻された勇次は芽が出ず終いで、ずっと不遇のままだった。

窓際族扱いの居心地の悪さに堪えかね、会社を辞めてしまおうかと思ったことが何度もあった。それも家族の事を考えると踏み切れず、堪えに堪えて、やっとの思いで停年を迎えた。そして、さあこれからは妻と二人でのんびりと老後の生活を

…、そう思つて単身赴任の社宅を引き払つて我が家に戻つたのが、三週間ほど前のことである。

しかし、その勇次を待ち受けていたのは妻と二人の幸せな家庭などではなく、思いもしない修羅の火宅であつた。

やっと帰つた我が家で、勇次が落ち着いて過ごせたのはわずか四日間だつた。

荷物の整理もあらかたついて、さてこれからどうやって毎日を過ごすか、朝食の後のコーヒーを飲みながら勇次がそれを思案しながらリビングでくつろいでいた、五日目の朝である。

妻の聡子が、

「話があるの！」

いきなりそう詰め寄つて夫の勇次に突きつけたのは、緑色の縁取りのある一枚の書類だつた。

突きつけられるまま、それを手に取ると、何と、それは離婚届ではないか：

晴天の霹靂とは正にこの事である。

勇次が手にしたその離婚届は、必要欄がすべて妻の字で埋められており、後は勇

次が署名捺印さえすれば役所に提出できる状態になつていた。証人欄の二人の名前に勇次は心当たりすらなかつた。

熟年離婚で夫婦がよく揉める。そんな話は同僚や上司からよく耳にしてきた。しかし、それが、まさか自分の家庭で起きるなんて想像すらしなかつた。そのまさか、我が身に現実起こつたのである。

勇次の目の前に座つたのは、長いあいだ見てきた妻の聡子とは別の女だつた。

「どうして今になつて離婚なんて言い出すんだ？」

そう問いただす勇次には、まさか、妻が本気で離婚なんて考えてるわけではないだろう。そうたかをくくるだけの心の余裕があつた。

そんな勇次に対し、

「今になつて？」

聡子は冷ややかに言った。

「あなたこそ、よくまあ、そんな言葉を私の前で吐けたわね！」

そう切り返す聡子の目が座つていた。

「よくまああだと？」

勇次も少し気色ばんだ。

「そうよ、よくもまあ、他にぴったりの言葉ないわ！」
冷酷なまでの冷ややさで聡子はそう言つてのける。

刃物こそ手にしてないが、言葉には棘の痛みがある。

「いきなり何を言い出すんだ、お前は……」

腹が立ちが先にきて勇次は言い返す言葉が浮かばない。

「あれから、ずっと単身赴任で頑張ってきた。辛らかったけどお前達のために頑張ってきたんだ……」

それだけ言い返すのがやっとだった。

「頑張ってきたのはあなただけじゃないわ。私が陰でどんなに苦勞し、どれだけ辛い思いしてきたか、あなたは一度だって考えたことがあるの？」

綾子は裁判官のように冷静である。

「あるの？」

と聞かれれば、ある、とは正面切つて答えられない。それが勇次の弱いところだ。いつも会社の事で頭が一杯で、家庭のことまであれこれ神経を配るゆとりなど、

これまでの勇次の会社人生にはなかった。窓際ポストで首の皮一枚のひやひや勤めを一七年間、それも妻子と離れての単身赴任で、一日また一日と、それこそ神経をすり減らすようにして堪えてきたのである。だから、その間、妻の苦勞を思ったり、娘の進学の事をあれこれと心を配ったりする余裕など勇次のどこにも残っていないかった。そんな弱みに怯む勇次を、聡子はこの時とばかり攻め落としにかかる。

「あなたが毎月送ってくるお給料だけで私と子供らの生活が成り立つてきたとでも思っているの？」

そこを突かれると、勇次は「ぐう」の音も出ない。

「私ら留守家族が生活し、その上に二人の子を大学に通わせるだけのお金を、あなたは自分一人で稼いできたとでも考えているの？」

聡子は勇次の止めを刺しにかかる。

バブル崩壊後の不況で、売り上げが急減し、支店閉鎖に追いやられ、本社に呼び戻された勇次を待ち受けていたのは、「支店つぶし」という有りがたくないマイナスのレツテルだった。勇次を待ち受けていたのは営業部付という役付きのない厄介

者扱いだった。課長待遇とは名ばかりで、部下もなければ、与えられる仕事も退屈なものばかり。不景気の最中、一度失敗した者に再度のチャンスを与えるほど会社は甘くなく、会社自体も不況の中で企業としての浮き沈みをかけての苦闘が延々と続いていた。

バブル後の不況は平成五年の秋には一応の底うちがきたが、それを待ち受けていたかのように進行する急激な円高と、その最中に起こった阪神淡路大震災による未曾有の被害。勇次の会社の第二本社ともいえるべき神戸支社もビルが倒壊し、その機能をストップした。

それらがやっと一段落したころ、アジアの通貨危機が勃発し、やがて我が国にも金融不安がやってきて中小の金融機関が次々と破綻し、やがてそれは都市銀行や大企業の経営不安となって波及していった。

政府主導の金融機関の再編が進む中、東の間のITバブルも、かつてない日銀のゼロ金利政策も、景気を底上げするまでには至らず、我が国の経済はこれまで経験したことのないデフレ基調へと向かっていた。

その後、小泉内閣の構造改革と、日銀の量的緩和政策によって、輸出型企業牽引の緩やかな経済成長へと向かったが、長い不況に髓まで冷え切った日本の経済全体への潤いは浅く、庶民の財布の紐は固いままであった。家具という耐久型の消費財を製造販売する国内市場型の企業にとって、冬の時代は依然として続いていた。そうした長い長い逆風に喘ぐ会社に、とどめの一刺しを与えたのが、リーマンショックであった。

どれだけチャンス我希望しても「つぶし屋」の勇次に、経営に苦しむ会社にそれを与える余裕などなく、一部同僚や部下の活躍を横目で眺め、周囲の冷たい視線を全身に感じながら、甲羅をかぶってひたすら耐える外なかった。基本給だって支店長で頑張っていた頃の方が多かったし、その頃は各種手当や出張費、営業費など工夫次第で月々かなりの額を浮かすことが出来た。

長い不況で何処の会社も給料のカットやリストラが当たり前で、勇次の会社とてその例外にもれなかった。わずかな昇進組の陰で、出世からこぼれ落ち、多くの上司や同僚が次々とリストラに遭って会社から姿を消していった。それは決して他人事ではなく、明日は我が身なのである。今日はどうにか無事に帰宅でき、ほっと一息つけても、翌朝の出勤はまた肩たたきを覚悟の出撃のような気分の家を出なければ

ばならなかった。何度もカットされた給料から単身赴任の生活費を差し引きし、家族に手渡すことが出来る金額はお世辞にも多いとはいえなかった。交通費を節約するために、帰省は月一度に減らし、休日はパン食で我慢した。それだけ始末しての仕送りも、二人の子を大学まで進学させるだけの費用をまかなうに足りる額ではないことは勇次も分かってはいた。

足りないお金を妻の聡子はどのように工面してたのか、そのために聡子が裏でどんなに奮闘してきたのか、勇次は我が身の事で精一杯で、そこまで気を配る心のゆとりなどなかったのである。

そんな思いに沈む勇次に、綾子は尚も攻めの手を緩めようとしめない。

「私が服飾関係の会社で働いてたこと、初めはパートだったけど、そのうちに本採用に取り立てられて名古屋勤務になって…、そんなことあなた知ってる？」

「知らなかった…」

そう答える外なかった。

何しろ、勇次が帰省するのは月に一度、それも休日なのである。

「こんな不便な家から名古屋まで乗り換え、乗り換えで通うのが、どんなに大変だったか…、でも、そうしないと生きていけないし、子供を大学へやることなんてとても…」

勇次はただただ頷くしかない。

「あなたは月に一度、休日に帰ってきて、お酒飲んでごろりと寝転んでいるだけ…、その傍らで私が会社で生き残るため、持ち帰り仕事に脂汗かいていたの、あなた気づいていた？」

黙んまり、を決め込むほかなかった。そんな自分が勇次はただ情けない。

「あなたは支店があんなことになって、本社へ転勤してからのこの十数年間、そりゃあなただって辛い勤めだったか知らないけど…、
停年迎えてそれも終わったじゃないの…、私の苦勞を見もせず、知ろうともせず、これからはのんびりと年金暮らし？…」

「…」

「結構な人生ね…」

「…」

「でも、私の方はこれからよ、これからが人生の正念場なの！」

聡子が言うには、会社は聡子の実力を評価し、今後かなり責任のあるポストに着かせる方針を決めているという。

「本社へ呼び戻されてからのあなたは、この街で働いてたときと別人よ、すっかり魂が抜けてしまつて：、まるで蟬のぬけ殻ね！」

その一言が勇次の胸にグサリと刺さった。

「昔のあなたなら何でも相談できたし、何とか二人でやっていくことも出来た。でも今の空蟬のようなあなたには何を相談してみても埒があかないし、これからの長い人生を共に手を取り合つてなんて、とても：」

傷ついた勇次の心に聡子は尚も粗塩を擦りつける。

「月に一度だけ帰ってくるぬけ殻のあなたを見ながら私はずっと辛抱してきたわ、あなたが停年になるまで、この家だけは私が守つてあげようつて：」

「：」

「あなたの停年で、その苦労が報われる日が、私が自分のための人生を生きる日が、やと来たのよ、やつとの事で：」

突発地震のように襲つてきた夫婦の離婚劇は、三日目に勇次が無条件降伏の白旗を揚げることで終わった。

「この家をお前に渡すよ」

その勇次の申出を、聡子にはべもなく撥ね付け、

「いらぬ、こんな田舎のお家なんか、私は来月から東京の本社勤めになるのと、勝ち誇つたように言い放つた。

東京本社の企画部でチーフのポストが待っているのだと綾子は誇らしげに言う。女の逞しさの前では、男はどうあがいても勝ち目などない。敗残兵の勇次はつくづくと思つた。老後の生活の糧にと、心宛にしていた退職金と年金の半分を、降伏の戦利賠償として勇次から奪い取り、聡子はその三日後にさっさと荷物を纏めて東京へ発つていった。

上の娘は既に結婚して家を離れており、次女は大学の都合でこの地に残るが、家からは出て下宿すると、これまた父に背中を向けて去つていった。停年で仕事を失つた父親など女の子にとっては役立たずの厄介者でしかないのだ。

見送る父親を振り向こうともせず去っていく娘の背を勇次は悄然と見送つた。

「まるで蟬の抜け殻ね」

聡子が言ったその一言が、心に深く突き刺ささり、棘のように疼いた。その疼きの中で勇次は思った。

(…痛みを感じるのは、それが的を射ているからだ。すべて聡子が言う通りだ。本社へ戻されることが決まったあの日、私の中から大事な何かが、すっぱりと抜け落ちてしまった。本社で過ごした私は、私ではない私なのだ…) だとすると…、ほんとの私は、今、何処で、何をしているのか…) 家族が去ってガランとした家の中で勇次はぼんやりと考え続けた。

そんな何日が過ぎた朝、勇次は街へ出た。

本社へ転勤してから一度も足を向けたことのないあの街へ。

虚ろな心に気兼ねでもするのか、自慢の足まで雲の上を歩くように頼りない。心許ないその足であちらこちらと街の中をほっつき歩いた。かつての勇次が靴底をすり減らして営業に飛び歩いていた、何もかも知り尽くした筈の街なのに、まるで今日初めて歩く街のようによそよそしく思える。街の何もかも、がらりと変わってしまい、昔の姿がどこにも残っていないのである。勇次が支店の店舗に使っていた建物は取り壊され、跡には新しいビルが建っていた。懇意にしていた取引先の店も一つとして残っていなかった。

足の感覚がなくなるほど歩き回った末、勇次の足は「あそこ」へと向かっていた。あそこ…、

それは街の中心点とでもいうべきところで、勇次がいた頃には大きなバスターミナルがあった。丸の内ビルの隣に切符売場とバスの待合室があり、いつも人が溢れて活き活と活気が溢れていた。幾つも並んでいる待合ベンチの、決まった場所に、決まった時刻に座る不思議な女がいた。

彼女は「ローズ」と呼ばれていた。「くたびれローズ」とか、「うらぶれローズ」とか、「捨てられローズ」とか、人はローズの頭に思い思いの形容詞をつけて呼んでいた。人が彼女をローズと呼ぶのはその特異な姿から来ていた。もう四十絡みと思えるのに、まるで十代の女の子が着るような派手な原色の服を身にまとい、いつも胸には赤いバラの花を一輪だけ挿している。身につける衣装は日によって変わったが、胸の赤いバラを忘れることはなかった。

どうしてそんな姿をするのか。どうしていつもそこに現れるのか、誰もそれを知らない。勿論、彼女がどこに住み、どんな生活をしているのか、それを知る者はいないし、彼女と話を交わしたことがあるという者を勇次は知らなかった。現れる時間は決まっっていて、その時刻が来るとどこからか現れ、いつも同じベンチの同じ場所に座る。小さい街なので誰もが彼女を知っている。だから、人はそこをローズ席と呼び、よほどの事がない限りそこに座る人はない。だから彼女は現れると悠々とその指定席に座り、そしてそのままじっと動かない。キョロキョロと人を探すでもないし、時間を気にする風でもない。

それでも、

「ああして、じっと誰かを待っているらしい…」

と、誰もがそう言う。誰の目にもそう映るらしいのである。

終バスまで、ずっと彼女はそうやてあそこに座り続けている。

見たようにそう噂する者もあった。

でも、ほんとは何も分からないのである。そして分からないままの方が返って好奇心をそえられるらしい。そんな「ローズ」が街の名物になっていたのである。

「まだいるだろうか？」

あそこ、へと向かう勇次はまるで恋人に会いに行くかのように心をときめかした。勿論、「ローズ」恋しという訳ではなく、強いて言うなら、今も変わらずそこに座る「ローズ」をこの目で確かめ、それで自分が自分であることを確しかめたかったのかも知れない。

ところが…、ローズの姿はなかった。

ローズばかりではない、バス停そのものがなくなっている。ビルも新しく建て替わり、ローズの座っていた場所そのものが無くなっていた。

不遇の本社勤めの間、ずっと心の支えとしてきた退職後の楽しい老後を、聡子の謀反で失った勇次は、今また、かろうじて記憶に残る輝いていた頃の自分まで失った気がした。

消沈し、痛む足を引き摺るように駅まで歩き、やっとのことで「うめか」の店を見つけたし、梅ちゃんが作ってくれたうめか割で硬く萎んだ心が少しとろけてきて、

「ローズはどうしたのだろうか？」

などと、あの頃のことを思い出していた。

「どうかした？、波河さん：」

仕事の手を止め、ちらりと勇次の顔を見あげ、

「元気ないのね、考え込んで：」

と、梅ちゃんが言う。

暖簾を上げたばかりで客は勇次だけである。

「お代わりでもどう、その飲みさしのグラスを空けて：」

勇次の好みの小鉢を用意しながら、にこりと笑顔を見せた。

滅多にお目にかかれない梅ちゃんの笑顔である。

ご機嫌なんだ、今夜の梅ちゃん。そう勇次は思った。

「ローズのこと、梅ちゃん知ってる？」

勇次は思いきって尋ねてみた。

「ローズって、例の胸バラの女？、また古い話ね：」

と梅ちゃんは言い、

「そのローズがどうかした？」

と怪訝そう。

「姿が見えなかったんだよね、今日あの場所に行ってみたら：」

「あたりまえよ、だって死んだもの、それも七年も前に：」

「死んだ？」

「そう、かなりの歳だったみたいよ：」

「：：：だろうね」

「私は会ったことないけど、ローズと親しくしていた友達がいてね：」

梅ちゃんはめずらしく自分でも梅割りを飲み始めた。

そんな梅ちゃんを勇次は初めて見る。

「その友達の話によるとローズは大家のお嬢さんがそのまま歳とったような世間ずれのない上品な人だったて話よ：」

「でも、あの派手な身なりは何のためだったんだろうね？」

「さあ、派手な身なりと言われても、会った事がないからね、私は：」

「ところで、何処に住んでたんだろうローズは？」

「観音寺ってお寺があるでしょう。あの橋を越えて少し行った所を左手に入ったところに、そのすぐ近くに家を借りて住んでたそうよ」

「それじゃ、僕の会社の支店があったところと目と鼻の先じゃないか」

「波河さんの会社もあの辺にあったの？」

「そう、あの門前の商店街のアーケードの中……」

「なら、ほんとに目と鼻の先だったのねローズの家と」

「一体いつからこの街に住むようになったのかね、ローズは？」

「それは友達も知らないって……」

勇次が梅割りのお代わりをすると、梅ちゃんも二杯目の梅割りを飲み始める。梅ちゃんはどうかやらいける口らしい。

「不思議なことがあってね……」

勇次がまた話し始めた。

「不思議な事って？」

「時々姿が見えなくなるんだよ、三ヶ月とか半年とかの間……」

「聞いている私も、その事は」

「もういなくなったのかなと思っていて、忘れた頃にまたひよこつと現れる」

「それよ、友達も不思議がってた……」

「その間はその借家にもいなかったのかな？」

「それはどうだか、でも家賃はきっちり払われてたらしいよ、もっともこれも聞いた話だけ……」

「働いてた様子もないけど、生活はどうしてたんだろ？」

「何でも大分の実家が資産家で、父親が亡くなった時にかんりの財産をもって、お金には不自由してなかったらしいの」

「ローズは大分の人なの？」

「らしいのね……」

「その人が何故この街で暮らすようになったんだらう？」

「それがね……」

と言いかけ、そこで梅ちゃんは梅割りをグイッと一口流し込み、

「聞けば気の毒な話なのよ……」

「何が？」

「何でも大分に住んでたときに好きな男が出来て、ローズの方は結婚したかったんだって：」

「ほう、恋の病というやつか？」

「もっと深刻なのよ、それが：」

「と言うと？」

「その彼が勤めていた会社の都合でこちらの方に転勤になったんだって：」

「それ遠距離恋愛ってやつじゃないの？」

「そんな単純な話じゃなくて、もともと親がその男との交際に反対で、これ幸いと、ローズを別の男と無理に結婚させたんだそうよ、可哀想に：」

「それなら何でこの街に住みはじめたの？」

「そこなのよ：」

梅ちゃんは話しに興が乗ってきたのか、またグラスを空けた。

勇次は梅ちゃんのピッチが少し気になる。

「結婚はしたものの夫との間がうまくいかず、ノイローゼというか、鬱つていうの？、詳しい事は分からないけど、ほとんど家に籠もりきりで外にでなくなった

らしいよ」

「やっぱり分からないな、その籠もりきりがなんでこの街なの？」

「友達の言うには、本人は気がいたらこの街に住んでたと言うだけで、それ以上は何も話さなかったって：」

「謎々だね、まるで：」

「分からないのは、まだその先よ！」

そう言いながら梅ちゃんはまたグラスを口に運ぶ。

「不思議なのはローズが死んだ後の話なのよ」

「と、言うと？」

「そう、ローズが借家で死んでるのをその友達が発見して、大分の実家へ連絡したんだって：、

そうしたら家を継いでいるお兄さんがびっくり飛んできたらしいの：」

「それじゃ、ローズがこの街に来ること知らなかったんだ実家では」

「そこよ、不思議なのは、やって来たそのお兄さんが言うには、洋子は：、洋子って名前だったらしいのローズは：、

大分の家で病んで寝たきりになってたのが、つい先日亡くなって、葬式を出したばかりなんだって！」

「まさか…」

勇次は思わず手のグラスを取り落としそうになった。

「そのまさかが、まさかなの…」

「それじゃまぼろしだったのか、あのローズは？」

「まあ、そういうことになりそうね…」

梅ちゃんも、半信半疑だ。

「そんな訳はないだろう」

勇次は言った。

それもそうである…、勇次がこの目で見てきたローズは、くしゃみもしたし欠伸もした。くしゃみや欠伸をする「まぼろし」なんか見たことも、聞いたこともない。

「まるで離魂記じゃないか、それがほんとうなら…」

「何なの、その“リコンキ”って？」

尋ねる梅ちゃんの顔がほんのり桜色に染まってきた。

2

離魂記は唐代の伝奇物語の一つで陳玄祐の作とされている。

魂が肉体から遊離してもう一人の自分として行動する。そんなテーマの物語だが、その種の物語は他にもいくつも存在するが、中でも離魂記は多くの人に読まれており、その内容は日本にも早くから伝わり、講談の題材ともされてきたし、戦後になってその翻訳が書物に搭載されさらに広く知られるようになった（岩波文庫、唐宋伝奇集（今村与志雄訳）の「倩娘の魂―離婚記」（同集上巻二〇頁））。

原文は簡略なもので、作者の陳玄祐が若い頃に聞き及んだとする筋立てで、およそ次のような内容が書き記されている。

唐の天授三年、張鑑という男が衡州にに住み役人をしていた。張鑑には二人の娘がいたが長女は早逝し、妹の倩という娘が残された。倩娘は顔立ちが整ってとても美しかった。張鑑には太原という所に住む王宙という甥がいて、この甥もまた幼い頃から聡明でとても美男子だった。張鑑はこの甥を気に入って、いつも大きくなった頃から倩娘と王宙を妻合わせようと口癖のように言っていた。その後二人は共に成長し、

相愛の仲になつていたが張鑑はそれに気づかず、また倩娘を王宙の嫁にする口約束もすっかり忘れてしまつていた。

その後、張鑑は官位があり将来が有望な若者から倩娘を嫁に欲しいと求婚され、これを承諾してしまつた。これを知つた倩娘はふさぎ込んで寝込んでしまい、王宙も張鑑の背信を悲り恨んで官吏になる試験を受けるといふ口実で都に上ることを希望した。張鑑はこれを止めたが聞かなかつたので遂にこれを許してやつた。

王宙は悲しみを胸に秘め二人を妻め合あわせるという約束を破つた張鑑を恨みながら船に乗つて故郷を後にした。日が暮れて数里離れた山里の辺りに着いた。

夜半眠れないでいるといると、船を追つて岸を足早にかけてくる足音があり、すぐ王宙の乗つた船に追いついた。王宙が誰かと尋ねると、それは倩娘であつた。倩娘は裸足で王宙の船を追つてきたのである。王宙は気も狂わんばかりに喜び、どうして自分を追つてきたのかと聞いた。倩娘は泣きながら、

「あなたが私を思つてくれていることは寝ても夢に見るほどであつた。親がその気持ち奪おうとしたが、あなたの気持ち変わらないことを知り、命に代えてでもあなたの心に報いようと家を飛び出し命からがらかけてきました」

と、言つた。

王宙は予期もしない嬉しい出来事に飛び上がらんばかりに喜び、倩娘を船に乗せ、匿つたまま夜を徹して先を急ぎ、数ヶ月して蜀の國に着いた。

およそ五年たち二人の子供が生まれたが、その間、張鑑とは音信が途絶えていた。妻の倩娘は親のことを思い出して涙を流し、

「私はこれまであなたの心に報いようと親の恩義を捨ててついできました。この五年間というもの恩のある親と離ればなれになつたままです。親の恩に背いたままどうしてこれから生きていけましょう」

それを聞いた王宙は、

「何も苦しむことはない、これから故郷へ帰ろう」

そう言つて二人は連れだつて衡州の親の元へ帰つた。

王宙が先ず一人で張鑑の家へ行き、事の成り行きを話して謝つた。それを聞いて張鑑は、

「倩娘は病を得てここなんか家で床についたままだ。なぜそんな嘘を言うのか」といふかつた。王宙は張鑑に対して、

「そんなことはありません倩娘はいま船でまっています」と言った。

張鑑は驚いて使用人を船まで確かめにやった。すると間違いなくそこに倩娘がいて顔色も良く活きいきとしており、その使用人に、

「お父さんは元気ですか」

と尋ねるではないか。

使用人は驚いて家に飛んで帰り、その事を張鑑に報告した。

家で寝込んでいた倩娘が傍らでこれを聞いて喜び、床から起きて化粧し着替えをし、笑みを浮かべ、倩娘を迎えた。すると二人の倩娘はぴったりと一つになり、二人の衣服まで重なった。

といった話である。

この魂が肉体から遊離してもう一人の自分が現れるという主題は、「倩女離魂」という題で禅の公案にも取り入れられている。無門関第三十五則に、

五祖問僧云、倩女離魂、那箇是真底（五祖山の法演禪師が僧に問うた。倩女は肉

体と魂が分かれてしまった。一体どちらが本物の倩女なのか）

とあるがそれである。

（岩波文庫、無門関、西村恵信訳注）。

自分自身とは別のもう一人の自分を見たり、意識したりする、この種の精神現象は、精神病理学や心理学の分野ではドッペルゲンガー（二重身）、分身体験、或いは自己像幻視など呼ばれ、自我の異常が意識の変容をもたらす精神病理の一種として研究や治療の対象とされている。

しかし、単に本人によって、もう一人の人物が見えたり、存在すると意識されたりするのではなく、ローズの例のように、一人の人物が別の場所、別の姿を人目にさらすという多重身の現象は、これを一体どのように理解すれば良いのか。巷でそういう話も、まま耳にするし、唐宋の時代からそのような物語が多く語られているとすれば、単なる奇談、怪談の類として火のないところの煙とばかり聞き流してもおれないのではないのか。

大学の講義で習った離魂記を梅ちゃんに話しながら、

もしかすると…、

「俺の肉体から抜け出た俺の魂が別の姿でどこかをさまざましているのではないか？」

勇次はふとそんな思いにとらわれていた。

「どうしたの？」

勇次の顔を覗き込みながら、梅ちゃんが言った。

「先程からグラスをじっと見つめながら何かしらぶつぶつ呟いて…」

その梅ちゃんの言葉に勇次は我に返った。酔いが回ってきたらしく、梅ちゃんの顔はすっかり満開のソメイヨシノになっている。

「弱くなったのかしら、波河さん、今日はまだ二杯目のグラスに口をつけたばかりよ」

「どうしたんだらうね？、自分でも分からない。何だか飲んだ酒が身体から漏れていくような…」

そう呟く勇次の顔を、梅割りのグラスを頬に当てながら、梅ちゃんはジッと見つめていたが、

「何だか蝉のぬけ殻みたい、今日の波河さんは…」

そう言っつて、うふふと笑い、

「でもね…」と、

急に真顔に戻り、

「私、何だか他人事のように思えなくて」

と今度は恐いくらい真剣な顔付をして言う。

「何が？」

と尋ねる勇次に、

「さつき話よ、リコンキとかいう物語のこと…」

「離魂記がどうしたって？」

梅ちゃんの話聞きながら、勇次は

「何だか蝉のぬけ殻みたい、波河さんって」

と言った梅ちゃんの言葉が気になっていた。

それは「まるで蝉のぬけ殻ね」と言った綾子の言葉とぴったり重なるからである。

「聞いているの？」

梅ちゃんは不満そうに口を尖らす。

「聞いている…」

と勇次、

「離魂だか離縁だか知らないけど、それって、私のことを言われているような気がする…」

と梅ちゃん。

「何で梅ちゃんが離魂記なの？」

上の空の勇次が尋ねる。

「だって、友達からローズの話聞いた時、私、随分と身につまされたのよ…」

「どうして？」

「他人事じゃないわよ！」

「…というと？」

「だって、私だってもしかしたら…」

「えっ、もしかしたら…？」

よそ事を考えながら上の空で梅ちゃんと話を交わしていた勇次は、梅ちゃんの

「私だって…」の言葉に我に還えった。どうやら梅ちゃんは酔ったの冗談ではなさそうだ。勇次は少し身を乗り出し、

「梅ちゃんがどうしてそう思うの？」

と尋ねる。

梅ちゃんはグラスを口に運びながら、言うか言うまいか思案をしていたが、やがて意を決したように話し始めた。

「私ね、ずっと昔、宝塚の舞台に立ってたの、とても信じてもらえないと思って、人には話さないことにしてたけど…」

「聞いたことある、それ、この店の常連の男から」

「私の育った村は、この街の隣の村で、随分と田舎なの、そこは…、村から宝塚の音楽学校に合格したの村が始まって以来だって、随分ともて囃され、期待もされたわ…」

「あの写真…」

勇次は壁に貼ってある写真を指し、

「梅ちゃんだろう」

写真は見事なセピア色に変色してしまっている。

「そうなの、ほとんど誰も気づいてくれないけど…」

梅ちゃんも写真を一枚、一枚、懐かしそうに見入っている。

「聞きたいな、その宝塚時代の梅ちゃんのこと」

「音楽学校を卒業してすぐ本科の生徒になって、雪組だったわ…」

そう言って梅ちゃん目はまた写真に戻り、

「それから五年ほど、夢の時代だったわ…、梅華遙って名前で舞台に立ってたの、その時代の写真なのこれ…」

「誰が撮ったの、それ？」

「追っかけ、って知ってる？」

と、梅ちゃんは勇次の顔を覗き込む。

「知ってる」

と、勇次、

「私にもいたのね、そんな追っかけの人が何人か…」

梅ちゃんはそう言いながらカウンターの中へしゃがみ込み、しばらくごそごそと

捜し物をしていたが、

「これ…」

と言って大きな化粧額に納まった四ツ切りの写真を取り出して勇次の前に置いた。華やかな舞台衣装にくるまれた梅ちゃんの写真である。

「それも、ファンが撮影してプレゼントしてくれたもの、花の時代ね、私の…」

勇次は写真を覗き込んだ。確かに梅ちゃんだ。しかし、見慣れた梅ちゃんとは別人の梅ちゃんがある。そこには写っていた。勇次は写真の満面笑みの艶やかな梅ちゃんと、カウンターのの中の梅ちゃんを交互に見比べた。

「違うでしょ、今の私と…」

勇次の心を見透かしたように梅ちゃんが言う。

「変わったのよ、あの時から」

「あの時？」

「準トップなんて噂されてたのよ、その頃は、それで舞い上がったのね私…、そのまま寄宿舎の生活を送っていたら良かったのに…」

飛び出して外から通うようになって、それが躓きのもとね、そもそも…」

「躓きって？」

「男よ：、男から甘い言葉で誘惑されて夢中になって、周りの猛反対を押し切って一緒になった：」

「へえー、梅ちゃんが結婚をね：」

「今から思えば、先が見えてたわね、すぐに行き詰まるのが：、男は生活能力なれなかつたし、外に女もいたりで：、半年とたたないうちに飛び出していったわ、男はただ宝塚の女優を口説いて自由にしたかっただけ：」

「それで、どうしたの？」

「路頭に迷ったわ、世間知らずだもの、私って、生活出来ないし：」

「また、宝塚に戻れば良かったんじゃないの？」

「それが許されないの、退団すると元には戻れない決まりなの、あそこは：」

「分かる気ずするな：、梅ちゃんの気持ち、華やかな世界にいただけにね：」

勇次は梅ちゃんの話の本社へ呼び戻されてからの自分の不遇の日々と重ねていた。

「結局は田舎の親を頼るしかなかった：」

「がっかりしたろうね、ご両親は？」

「怒られたわ、世間に恥ずかしくて家に置いておけないって：」

「辛かったろうね、梅ちゃんも：」

勇次は梅ちゃんの話が他人事のように思えない。

「それからよ、この店を出すこと思いついたのは：、と言っても、ローズと違って、私ん家は金持ちじゃないし、水商売の経験もないしで：、あるのは昔から凝っていた梅酒作りと、焼酎選び、それに一寸した料理の腕ぐらい。それを組み合わせたらこんな「うめか」の店が出来た：」

「珍しさが返って客に受けたのかもね：」

「お陰で何とかこれまでやってこれたわ：」

梅ちゃんはもう三杯目のグラスを手をしている。

勇次はまだ二杯目のグラスをもて余している。

「大丈夫かい梅ちゃん、少しペース早すぎるんじゃないの？」
と、勇次が気遣う。

「心配ないわ、今日は何となく気分がよくて、飲みたいの：」
そう言いながら梅ちゃんはカウンターに頬杖をつき、

「店を開いてみて初めて気がついたの、私が私を何処かへ置き忘れてきているってことを…」

「どうということ？」

「お客さんを迎えても、「いらつしやい」という言葉までは何とか言えても、にっこりと微笑むことが出来ないの…、どんなに努力しても…」

「この写真の梅ちゃんは満身これ笑みって感じだけ…」

「そうよ、その頃の私は…、いつも自然に笑みがこぼれ出て、その笑顔が私の取り柄だって、みんなに言われてたけど…、その笑顔をそっくり何処かへ置き忘れてきて…、お店を開いた私からは消えてなくなってた…、きつと、置き忘れてきた私が本物の私で…、ここにいるのは私の抜け殻…」

「それじゃ、その本物の梅ちゃんは今どうなってるの？」

勇次が興味ぶかそうに尋ねる。

「スポットライトを浴びながらまだあの宝塚の舞台で踊ってるのかもよ…」
梅ちゃんはお代わりのグラスを口に運びながら、

「でも、それでいいのか…」

と呟くように言う。

「どうということ？」

勇次が尋ねる。

「だって…、今の私と、舞台上で華やかに踊ってる私とがいて、その二つの私がセツトで一つの私だと思えば、その方が夢があって幸せなもの…」

と梅ちゃんは笑い、

「ローズもきつと同じ思いだったんじゃないかな…、好きな男と一緒にのもう一人の自分がいて…、それが病んでる自分とが一つになって、それで幸せに人生を終えることができる…」

そう言いながら梅ちゃんは満開の桜のように艶やかに笑った。

その笑顔の梅ちゃんが、勇次には、写真に写る舞台衣装の「梅華遙」とぴったりと重なって輝いて見えた。

その時、列車の近づく音がして「ボー」と汽笛を鳴らした。

その終列車の合図の汽笛に瞬間的に勇次の身体が反応し、
瞬間的に勇次は席を立ち、

「梅ちゃん、また…」

と言うが早いか、暖簾を払って「うめか」の店を飛び出し、駅のホーム目ざして一目散に駆けだした。

間一髪のところまで終列車に飛び乗った勇次に、輝いていた昔の勇次がしっかりと戻ってきていた。

了